

チェルヌイシェフスキイとカヴェーリン

——一八六〇年代のロシアの革命的民主主義者と
自由主義者をめぐって——

今 井 義 夫

はじめに

一九世紀半ばのロシアにおける自由主義と革命的民主主義の対立の問題は、ロシア社会思想史や文学史の研究領域での伝統的なテーマである。とりわけ、一八五五年のクリミア戦争の終結から一八六一年の農奴制廃止令前後の時期は、両思潮の協調と対立をはらんだ時期として研究者によって重要視されてきた。

筆者は、このテーマについて従来、二、三の論考を發表してきたが⁽¹⁾、最近では、チェルヌイシェフスキイをめぐる研究論集⁽²⁾(金子幸彦・他編、社会思想社より今年中

に出版予定)のなかで、「チェルヌイシェフスキイのロシア改革論」と題して、主としてチェルヌイシェフスキイ(H. I. Чернышевский, 1828—1889)とチチエーリン(B. H. Тичерин, 1828—1904)の対立を軸として、農奴制廃止期の両派の動向を社会思想史の見地から検討した。そのなかで、チェルヌイシェフスキイとカヴェーリン(K. Л. Кавелин, 1818—1885)との関係についても副次的に言及したが、紙数の制約と資料の不足から、充分に意を尽せなかった。最近になって、サラートフの社会思想史家A・A・デームチェンコの論文「革命的民主主義者たちの自由主義者たちからの訣別の歴史より

(チエルヌイシエフスキイとカヴェーリン⁽³⁾)」を入手したのを機会に、本論で両者の関係についての従来の筆者の発表の不足を補うことにした。

筆者がとくにデームチェンコの労作に注目したのは、彼がサラトフのチエルヌイシエフスキイ研究所の伝統的な実証的学風に沿って、ソ連科学アカデミー付属ロシア文学研究所(ИРЛИ)の手稿部のカヴェーリン・フョンドの資料を中心とする未公刊の手稿資料を幾つか検討し、チエルヌイシエフスキイとカヴェーリンの関係についても従来不明確なまゝにされていた問題点に具体的な説明を与えているからである。その結果、われわれは(一)両者が一八五〇年代のはじめから一八六一年末までは相互に敬愛し合う、友好的な関係にあったこと、(二)カヴェーリンの「ロシアにおける農民解放に関する覚書」をチエルヌイシエフスキイが『同時代人(ソヴレメンニク)』に掲載したのは、彼の独断的行為ではなかったこと、(三)カヴェーリンとチチェーリンの間には改革期に進歩的自由主義者と保守的自由主義者としての思想的対立と分裂があったこと、(四)一八六二年二月の海外出張を機に、カヴェーリンの思想的転換が進み、チエルヌイシエ

フスキイら革命的民主主義者への敵対的な態度が顕著となったことなどをより具体的に理解することができるようになった。

以下の叙述は、それらの四点について、主としてデームチェンコの論旨を紹介しつつ、筆者なりの見解を示したものである。

凡例

文中でチエルヌイシエフスキイ一六巻全集からの引用は(一)内に巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で示す。

デームチェンコの前掲論文からの引用は(一)内にD・とページ数のみを示す。

(1) Y. Imai, "The London Meeting of Herzen and Chernyshevsky in June 1859," 『工学院大学研究論叢』第八号、一九六九年、所収。

今井義夫「ロシア自由主義者の誕生」『一橋論叢』第七六巻第三号、一九七六年所収。

同「ゲルツェンとカヴェーリン——四〇年代人の友情と訣別——」金子幸彦編『ロシアの思想と文学』恒文社、一九七七年所収。

(2) この『チェルヌイシェフスキイ論集(仮題)』は、チェルヌイシェフスキイの世界観と活動の全面的な検討をめざしたわが国で最初の共同研究論文集である。

(3) А. А. Демченко: Из истории размежевания революционных демократов с либералами (Чернышевский и Кавелин) 1979. Деемченкоのこの論文が掲載されているのは、サラトフ発行の『ロシアにおける解放運動』誌第九号(一九七九年) (“Освободительное движение в России” Саратов, вып. 9, 1979. с. 22—39) である。

(4) サラトフのチェルヌイシェフスキイ研究所は、一九五八年から研究論集シリーズ “Н. Г. Чернышевский, статьи, исследования и материалы” Саратовское книжное издательство を発行し、一九七一年までに六巻を数えている。そのなかで、デееムченкоの執筆した論文は次の四点がある。

Из истории полемик Н. Г. Чернышевского с А. В. Дружининым. 1965. В т. 4.

Проблемы научной биографии писателя в трудах Н. Г. Чернышевского. 1968. В т. 5.

Чернышевский и Герцен в 1859 году (к истории полемик). 1971. В т. 6.

Необходимые уточнения. 1971. В т. 6.

一 両者の出会いとカヴェーリンの改革思想

従来、ソビエト史学の文献において、チェルヌイシェフスキイにたいするカヴェーリンの關係は、一八六二年以降の否定的關係が強調され、それ以前の友好的關係について言及することが少なかった。そのことは、カヴェーリンの農民解放活動全体にたいする否定的評価にもつながっていた。

デееムченкоは、そのような傾向の一因として、チェルヌイシェフスキイが一八六二年に逮捕された時のカヴェーリンの冷淡な反応にたいするレーニンの批判的な評価の影響をあげている。そして、そのような否定的評価が農奴解放後のカヴェーリンにとって正しいとしても、それ以前の時期にまでさかのぼって機械的に適用することは不適當であり、その時代の思想の独自の姿をゆがめることになるとして反対している(D. 22)。彼の指摘をまつまでもなく、筆者も、カヴェーリンが改革以前に反農奴制運動に積極的な役割を果たしていたこと、ゲルツェンやチェルヌイシェフスキイと親しい關係にあり、それが当初農奴制反対の統一戦線を可能にする前提とな

っていたことを指摘してきた。⁽¹⁾

チエルヌイシエフスキイとカヴェーリンの最初の出会いは、デームチェンコによれば、一八五〇年であった。前者がペテルブルク大学を卒業して、貴族連隊の教育機関でのロシア文学の教師になるために試験をうけた時、たまたまその試験講義に立ち合ったのが、当時軍関係の教育部長をしていたカヴェーリンであった。彼はこの試験講義の後の講評で、チエルヌイシエフスキイにたいして非常に好意的であったという。後者もまた、彼について「極めてデリケートで、温和で、信頼できる」(XIV, 206) 人物という印象を友人への手紙に記している。

チエルヌイシエフスキイがカヴェーリンにたいして抱いた敬意は、当時彼が自分の尊敬していた「四〇年代人」ペリンスキイ、ゲルツェン、グラノフスキイ、トゥルゲーネフらの親しい友人であり、ニコライ一世歿後のロシアの改革運動の指導的人物であったからであった。

改革派のなかでカヴェーリンの名声を一躍たかめたのは、彼がクリミア戦争の敗戦の年、一八五五年に書いた「ロシアにおける農民解放に関する覚書」⁽²⁾(以下、「覚書」と略記する)であった。その内容は、ロシアの現存体制

が西欧諸国にくらべて著しく遅れ、欠陥に充ちていることを、政治・経済・軍事・教育のすべての面で指摘し、その最大の禍根を農奴制の存在とみなして、その廃止をはじめとする全般的な改革の必要を説いたものであった。この「覚書」は人々の間に秘かに手写されて拡がっていたが、ニコライ一世の専制体制とその東方政策の破綻によってたかまった国内の体制批判の声を集約し、指導する文書として歓迎され、自由主義的改革派の綱領的文書とみなされていた。この「覚書」の最初の小部分はロンドンのゲルツェンのもとに送られて、『ロシアからの声』のなかに収録され、残りの部分は、チエルヌイシエフスキイに手渡されて、彼が編集していた『同時代人』誌の一八五八年四月号に匿名で発表された。この最後の経緯については次章でふれることにする。

こゝでは、デームチェンコが引用しているカヴェーリンのアレクサンドル二世宛の手紙の下書にあらわれた彼の改革思想の一面にふれておきたい。未公開のこの手紙の下書は、一八五六年三月三十日に皇帝がモスクワの貴族団の代表者たちの前で漏らした「上からの」改革の意図に関連して書かれたものであるが、その日付の部分

と結びの部分が欠けているとのことである (D. 29)。

その手紙のなかで、カヴェーリンは皇帝の改革へのイニシアチブを歓迎し、クリミア戦後のロシアにとっての新時代は、暴力的な形をもって進められるべきでなく、危機のあげくとしてでもなく、平和的で、平穩に、政府の活動によってもたらすべきだと主張している。そして、皇帝に、農民の解放への期待のたかまりに答えること、知識人に改革の公開性⁽³⁾と思想の自由を保障すること、すすめ、そのことによって、社会的要素と権力との接近をもたらず効用を説いている。さらに、そのような開明的な政策こそが革命や暴力的変革を防ぎ、政府を破滅から救うことを強調している。モスクワでの皇帝の発言に關連して、彼は農奴解放についての反対勢力への譲歩や実施の遅延は平民を絶望に追いやるものだとし、その実施の促進の必要を説いている (D. 29~30)。

この皇帝への手紙が実際に送られたか否かについてデームチェンコは明らかにしていない。しかし、その手紙を、当時彼がチチェーリンと合作してゲルツェン宛に送った匿名の『出版者への手紙』と並読すると、彼の政治的性格が一層明らかになる。後者では、彼は戦後のロシ

アにおける改革思潮の主流が自由主義にあることを強調し、ゲルツェンにたいして、社会主義の宣伝や革命への煽動をやめて、皇帝の改革事業への協力を呼びかけている。平和的で合法的な改革による市民的自由の実現を彼は専制政府の下での漸進的改良によって可能であると主張し、民衆の政治能力や農村共同体の原理に期待するゲルツェンのロシア社会主義の主張を有害無益なものとして排斥しているのである⁽³⁾。

チェルヌイシェフスキイが当時この『出版者への手紙』を知っていたかどうか不明である。たとえそれを読んでいたとしても、その匿名の執筆者の一人がカヴェーリンであったとはゲルツェンと同様おそらく知らなかったであろう。彼は農奴解放運動の指導的論客としてのカヴェーリンを高く評価しており、反社会主義者としてチチェーリンにつながる面については当時あまり問題にしなかったようである。

彼は当時カヴェーリンをロシア史研究にたずさわる歴史家のなかで第一級の学究とみなしていた。その評価は、多分に彼の歴史学における西欧主義的傾向と、反農奴制的見地にかゝわるものであり、それらに關連して、「そ

の諸原理は大いに尊敬に価する」(IV, 686)と記している。一八五六年の彼の論文「ロシア文学のゴーゴリ時代概観」第五章では、カヴェーリンの名をソロヴィヨーフとともにあげて、「わが国の国家的生活の諸事象と発達の意義をはじめてわれわれに明らかにした新しい歴史学派の主要な代表者たち」(III, 181)と呼んでいる。

カヴェーリンがチエルヌシエフスキーをひきつけたもうひとつの要素は、多様な思想傾向の人々を調和させ、極端に意見の異なる人物とも一致してゆけるという彼に特有の性格と能力であった。デームチェンコはこの点について、彼の同時代人の次のような証言を引用している。

「彼のサークルは、いつも一つの同じ色彩に彩られることはなかった。そして、人々は、誠実で、たとえ対立する信念の人でも、サークルのなかでは敵としてではなくつきあっていたし、頑固な反対者でもそこでは友好的であった」(D, 24)。また別の証言者は、彼が「すべての人々を調和させ、すべての人々を結びつける」能力をもっていたと記している(D, 24)。

このようなカヴェーリンの能力は、彼の天性のものであるが、おそらく彼が青年期を過した四〇年代のモ

スクワのスタンケーヴィッチのサークルにおいて養われたものであろう。それは多かれ少かれゲルツェンのなかにもみられる傾向である。そのような四〇年代人の寛容さのゆえに、カヴェーリンは右はカトコーフやチチェリンから左はチエルヌシエフスキーやドロリーエボフまでをふくむ広汎な意見の人々を友人として迎えていた。しかし、そのような思想の違いをこえた連帯は、一八五九〜一八六二年にかけてのいわゆる「革命的情勢」の進展のもとに崩壊してゆくのである。

- (1) 前掲拙稿「ゲルツェンとカヴェーリン」その他参照。
- (2) Письма К. Д. Каверина и И. С. Тургенева к А. И. Герцену, 1892. стр. 3—4. Вкл. Письма К. Д. Каверина и略記する。
- (3) “Записки об освобождении крестьян” 1855. その内容については、前掲拙稿「ゲルツェンとカヴェーリン」のなかの「二、カヴェーリンの農奴解放論とその反響」を参照されたい。
- (4) 同右、「ゲルツェンとカヴェーリン」の第一章参照。

二 『同時代人』誌へのカヴェーリンの「覚書」の掲載をめぐって

先にあげたカヴェーリンの「覚書」が『同時代人』のチェルヌイシエフスキイの論文「農村生活の新らしい条件について」の第二論文に「われわれの共通の公式」(V, 108)として掲載された経緯については、従来、それがカヴェーリン自身の意図にもとづくものか、あるいはチェルヌイシエフスキイの独断的行為であったかについて確定的な解答が研究者たちの間でも示されていない。当時、この件についてチェルヌイシエフスキイは多くを語らなかったし、カヴェーリン自身は時期によって矛盾する発言をしていたからである。

もし、カヴェーリンが敢えてこの「覚書」の発表をチェルヌイシエフスキイにまかせたのだとするならば、両者の関係は当時きわめて親密なものであったことになり、また、改革運動へのカヴェーリンの積極的姿勢を示す重要な証拠にもなる。また、もしそれが、後年カヴェーリンが述べたようにチェルヌイシエフスキイの独断的行為であったとすれば、この発表にまつわる政府の弾圧と宮廷の反動派の画策によって、皇太子の教師としての地位を追われたカヴェーリンは、チェルヌイシエフスキイに政治的に利用された気の毒な被害者ということに

もなりかねない。

事件から約一ヶ月後に、カヴェーリンはカトコフ宛に送った手紙(一八五八年三月十日付)のなかで、「覚書」の公表は自分の意志ではなかったとでもいわんばかりの自己弁明を試みている。その一部を以下に引用しよう。

私は君や私のモスクワの友人たちや例の罪への同情者たちの前ではほっとする。それは無実の罪なのだから。君は私と『同時代人』との関係を知っている。その同人たちすべてのなかで、私はチェルヌイシエフスキイと親しいし、彼を好きだし、尊敬している。チェルヌイシエフスキイは度々私のところにやってきて、私の解放案を求めている。私はそれを彼に与え、彼に著作権(интересный случай)を与え、とつけくわえもした。チェルヌイシエフスキイは私とネクラソフやその他の人物との関係も考慮しないで、それからの抜粋をまるごと、私の名を省いて『同時代人』に印刷したのだ。事はすでになされてしまった。そして、私はたゞ自分の無頓着さに赤面している

ところだ。検閲はその論文を……(原文欠除)⁽¹⁾が、それは通過するはずだ。チエルヌイシエフスキイがそんな風に使うことを知っていたら、私としては別な扱いをしたのだが。なぜなら、ネクラソフやバナエフと私とは、いかなる連帯も受け入れられないからだ(D, 26)。

この手紙では、彼の弁明にもかかわらず、「覚書」をチエルヌイシエフスキイの求めに応じて手渡したのは、彼自身であること、しかも、その著作権を与えようと約束したことを認めている。

その後、四分の一世紀を経た一八八五年に、カヴェーリンは歴史家のB・H・セメーフスキイに「覚書」の全文を送り、そのなかに同封した手紙で、かつてチエルヌイシエフスキイが著者の同意も許可もなしに、その断片を公表したのだと書いている(D, 26)。

ところが、デームチェンコがあげているもうひとつの証言は、以上のいずれとも矛盾する。それは一八五九年一月八日付のチチェーリン宛の手紙である。そのなかでカヴェーリンは、自分が『同時代人』誌上で、敢えて土

地買戻し問題を卒直に提起したために、最高に危険な人物として五月に皇太子から引きはなされたと報告しており、「覚書」の公刊の事実を自らの仕業とみなしている⁽²⁾。

このような積極的な彼の姿勢を裏づけるもうひとつの資料としては、一八五九年に執筆されて未刊に終わったチエルヌイシエフスキイの論文「非難と釈明」の一節がある。そこではチエルヌイシエフスキイは、カヴェーリンが「覚書」を彼らの雑誌、すなわち『同時代人』に印刷することに同意したことについて言及し、「著者の同意は、事業への彼の愛からのみ発したものだといえる、なぜなら著者はわが雑誌にたいして個人的にはもったもな敵対的な関係にあるのだから」(V, 768)と記している。

デームチェンコは前記のカトコフ宛の三月一〇日付の手紙からして、カヴェーリンは問題の『同時代人』の掲載号の検閲通過に関するすべての事情に通じていたと判断する。それ故に一八五八年三月三十一日と四月一日の該当号の検閲許可までに、彼が「覚書」の発表を中止することも可能だったと推測している。従って、彼の結論は、チエルヌイシエフスキイによるカヴェーリンの「覚書」の掲載はすべて著者自身の同意と許可を得ての上で

のことだといふのである (D. 26)。

デームチェンコのこの結論は、カヴェーリンの同意が必ずしも『同時代人』への掲載ではなかったという弁明を軽視しているように思われる。しかし、従来ソビエトの研究者のなかには、チェルヌイシエフスキイが『覚書』の内容を自己の政治的意図に合わせて書き改めているとか、⁽³⁾掲載を単なる戦術的配慮によるものだとする説があったのにくらべて⁽⁴⁾デームチェンコは、彼が「覚書」を『同時代人』のプログラムとしたことを実質的な意味で受けとるべきだとする。そして、その掲載は「まだ前面に強力な敵（農奴制支持者たち）が存在する時に、民主派と自由派の間にある程度の思想的連帯と少からぬ接点があったことを証明している」(D. 26)とみるのである。その点については筆者も同意見である。

例えば同じ時期に書かれたチェルヌイシエフスキイの論文「地方人氏の批評への回答」(『同時代人』誌一八五八年三月号)のなかで、彼は農奴制廃止論者の大多数が地主層に属しており、「有能な諸改革案が地主層出身の人々によって構想されている」(V. 19)事実を認め、もっとも教養ある階層としての地主層が、農奴解放によ

る国民生活の改善という国家的事業にたいして同情と協力を示すように彼らの良心に訴えているのである。

この時期にカヴェーリンの「覚書」を諸々の改革案のなかからもっともすぐれた改革案として選び、これを共通の「公式」としてかゝげた背景には、このような彼の状況認識と統一戦線の必要性の認識があったのである。

「覚書」の掲載をめぐる政府の弾圧は、カヴェーリンが自ら記しているように、農奴農民の解放にあたつての土地買戻し案（土地付き解放案）の主張が、この段階で政府の側の意図にそぐわないからであつた。チェルヌイシエフスキイはこの事件を通じて、彼が期待する改革（農民の土地付き解放と農村共同体維持）への皇帝と政府の不熱心さ、無能さを読みとっている。彼の批判が以後、農奴制そのものから、それを支えるアジア的専制権力としての皇帝政府^{ツァーリズム}に向けられはじめたのは、この事件の教訓によるものと思われる。これにくらべて、カヴェーリンは、この事件以後も改革運動の合法性に固執する。

しかし、チェルヌイシエフスキイとカヴェーリンの交友関係は、この事件によつても損われなかった。その後一八五八年にウクライナの民主的詩人シェフチェンコ

のペテルブルク到着を機に、歴史家H・И・コストマーロフの家で火曜日毎に開かれた会合には、兩人はともに常連であったという(D. 3)。両者の交友関係は一八六一年頃までつゞくのである。

(1) この欠落部分には「つまんだ」とか「ひきむした」という意味のロシア語の単語があったと推測される(D. 26)。

(2) Воспоминания Бориса Николаевича Чернина. Путешествие за границу. М., 1932, с. 59.

(3) チェルヌイシエフスキー一六巻全集第五卷(一九五〇年)の注の執筆者K・ジュラーヴレフは、彼による改ざん説をとる。しかし、デームチェンコは「覚書」の原文と『同時代人』掲載のものとを詳細に比較し、合計二六個所の削除があることを確かめた上で、そのいずれもが国家体制や検閲や皇帝の活動への批判の個所であり、削除は検閲当局によるものと推定している。

(4) B・H・ローゼンタールが、その論文のなかで「覚書」の掲載はチェルヌイシエフスキーの戦術的配慮によるものとしていることには、デームチェンコは理解を示してゐる。См.: В. Н. Розенталь, Русский либерал 50-х годов. XIX. (Общественно-политические взгляды К. Д. Кавелина в 50-х—начале 60-х годов). — В кн. «Революционная ситуация в России в 1859—1861

Г. М., 1974, с. 250.

三 自由主義者の分裂とカヴェーリンの立場

デームチェンコの論文のなかで注目すべき指摘のひとつは、革命的情勢(一八五九—一八六一年)のもとで、自由主義者の陣営のなかにも分裂が生じたという指摘である。具体的には、政府の政策を無条件に擁護するチチエーリンと、彼に批判的なカヴェーリンとの論争である。それが同時に、チェルヌイシエフスキーとカヴェーリンとの友好的な関係をその後も維持することにも役立ったというのである。

一八五八年末からのチチエーリンのゲルツェン批判にはじまる『コロロル(鐘)』誌上での論争は「告発状」論争と呼ばれ、ロシアの改革路線をめぐる一大論争として知られている。この論争の発端となったチチエーリンの批判は、『コロロル』にあらわれたゲルツェンの革命的扇動の論調を非難し、情熱への呼びかけに代えて慎重・冷静な理性的改革への呼びかけを要求したものであった。これにたいしてゲルツェンはチチエーリンを保守的自由主義者、あるいは一本調子の教条主義者と呼んで

その要求を拒否した。この論争にあたって、カヴェーリンはトゥルゲーネフ、ケツチェルその他の友人たちとは違って、連名の抗議状をチチェーリンに送り、その発言の不当さを非難したのである。従来この抗議状は本質的にはチチェーリンの政治的立場と対立するものではないとみなされがちであった。しかし、デームチェンコは、この自由主義者間の対立の事実を重視し、チチェーリン的な保守的自由主義者にたいして、カヴェーリン的な民主主義的自由主義者もしくは自由主義的進歩主義者の存在を対置するのである(D. 31)。事実カヴェーリンは当時、チチェーリンへの抗議によって民主的グループの中で人気を高めていた。そして、チェルヌイシエフスキイはその抗議の内容の弱点や欠点を認めながらも、カヴェーリンの行為を評価し、両者の友好関係はこのことによっても強化されたとみるのである(D. 31)。

この時期の自由主義者の分裂に関しては、カヴェーリンとカトコフの関係についてもあてはまるが、彼らの分裂のきっかけになったのも、チェルヌイシエフスキイにたいする両者の評価の対立であることは興味深い。デームチェンコがレーニン図書館の手稿部から見出したカ

ヴェーリンからカトコフ宛の一八五八年一〇月二〇日付の返書は、チェルヌイシエフスキイにたいする彼の弁護論で、当時のカヴェーリンの見解を知るために有益な資料である。次にその一部を引用しよう。

彼を私は親しく知っています。そして、あなたに、彼が信念のない人間だと呼ばれるような人物でないことを確信をもって請けあうことができます。彼と同意しないことはできません。実際に、同意はしばしばむしろ……(原文欠除)。別のことなら彼と同意するでしょう。だが、自己の信念への誠実さと正直さに関して、彼は非難の余地がないし、深い尊敬を受けています。彼は大きな影響をもち、また熱烈な信奉者たちをもっている最良の人間の一人です(D. 32)。

この手紙は、カヴェーリンがチェルヌイシエフスキイとの意見の相違を意識しつつも、その信念への誠実さと影響力を高く評価していたことを物語っている。

カヴェーリンのこのような態度は、カトコフ側には不満であり、そのことは、彼の雑誌『ロシア報知』の共

同編集者П・М・レオンチェフの一〇月二七日付の返書にも示されている。そのなかで、カヴェーリンは「局外中立主義^{デファレンチズム}」として非難されているのである(D. 33)。また「個人の自由、言論の自由、改善された行政」を認めないチエルヌイスキイに積極的に「反対し」、彼の影響の下で、「生活の要求についてのあらゆる現実的見方」を失っている若者たちを彼からひき離すようにと訴えられている(D. 32)。

さらに、一月二八日付の手紙でレオンチェフはカヴェーリンにたいして、「個人生活では寛大であり得るし、また、とことんまで寛大であるべきだが、文学では、寛大であるべきではない。そうでなければ、明確な方向性がないことになるだろう」(D. 33)と彼のあいまいな態度への不満が述べられたという。そして、同じ時期に、カヴェーリンはスラヴ主義者の活動についての評価をめぐって『ロシア報知』におけるカトコフらの厳しい批判に反対して、彼と袂を分かつていたっている。

一方、カヴェーリンとゲルツェンの関係についてみると、ドブロリユーボフの余計な批判に怒ったゲルツェンの『同時代人』誌編集部への反論“Very dangerous!!!”

をめぐって、カヴェーリンはゲルツェンの主張を全面的に支持し、一八五九年七月二〇日にわざわざロンドンを訪れてゲルツェンとの感動的な再会をしている。両者には、四〇年代にモスクワの学生グループで培われた共通の感情と思想とがあった。ゲルツェンは彼を迎えたことを、親友オガリョーフのロンドン到着(一八五七年)以来の最大の事件であると記している(Д・В・スターツフへの手紙⁽¹⁾)。

他方、その二カ月後にロンドンを訪れたチエルヌイスキイは、ゲルツェンとの会見で、必ずしも意見調整に成功しなかった。この会談の後で、彼がドブロリユーボフに書き送ったゲルツェンについての印象報告が「カヴェーリンの自乗⁽²⁾」という表現であったことは意味深い。彼は六〇年代の雑階級人出身の革命的思想家の立場から、兩人に共通した四〇年代人貴族思想家の自由主義的な性格と、その政治的限界を感じたのである。

デームチエンコがとくに強調しているのは、一八五九—一八六一年のいわゆる革命的状态といわれる時期にいてのカヴェーリンの立場がチチェーリンとは異り、反動的な君主主義者でも、保守的自由主義者でもなかった

ということである(D. 33)。チェルヌイシエフスキイの用語では、彼はまだ自由主義的「進歩主義者」に属していたのである(D. 33)。

このようなカヴェーリンとチチエーリンの相違は、一八六一年秋の大学紛争に対する両者の対応の相違と論争のなかにも端的にあらわれている。この年、政府批判の世論の中心となった大学への一連の弾圧処置のなかで、ペテルブルク大学では学生の自治的互助組織「スホートカ」の禁止が学生たちの激しい反発を招き、警察力の導入と大学の閉鎖までひきおこした。この一連の事件の間、当時ペテルブルク大学教授であったカヴェーリンは、自らの「聖ペテルブルク大学の学生紛争に関する覚書」の中で、大学の旧定款（一八三五年制定）の改訂による根本的改善の必要を説き、大学がひどく警察的な性格をもつて学生に対処していることに反対した。また、「スホートカ」の禁止や大学入学者の数の制限の強化にも反対し、貧しい学生の授業料の免除や納入金の削減を提案している(D. 34)。

大学が閉鎖された後、カヴェーリンは、首都からの退去を迫られている多くの学生たちのためのよき保護者と

して彼らを守ったといわれる(D. 34)。カヴェーリンのこのような民主的・進歩的教師としての態度は、当時の学生たちの大きな支持と期待を集めていた。

他方、モスクワ大学の教授であったチチエーリンは、ペテルブルク大学でとられた強硬な弾圧政策を自校にも導入しようとして、カヴェーリンの激しい批判をうけた。一八六一年一二月半ばにチチエーリンに宛てた手紙の中で、カヴェーリンは「われわれの見解、方向、現実的手段、共感と反発は全く異なっている。われわれは徹底的に違っているのだ⁽³⁾」とさえ書き送っている。そして、これにたいするチチエーリンの側からの関係修復の試みは失敗に終わっている。

チェルヌイシエフスキイがこの大学紛争に当って、評論の上でも、实际行动の上でも熱心に学生を支援し、政府の弾圧に抗議したことはよく知られている。彼は評論「変化のはじまりではないか」(『同時代人』一八六一年一月号)のなかで、チチエーリンらの反動の見解を批判した。その際、カヴェーリンの所説をとり上げ、これを支持するという方法をとっているが、このことはデームチェンコによれば、検閲上の制約のためであり、『同

『時代人』の編集局は他方ではカヴェーリンの中立主義的立場が学生の反政府運動に影響を及ぼすことには反対であったとしている。その具体例として、チエルヌィシェフスキイが同じ論文の中でも、すでに学生たちは、自由主義者を「無意味なおししゃべり屋」とみなしはじめていると書いている点をあげている(X, 176; D, 34)。

一方、デームチェンコは大学紛争をめぐるカヴェーリンとチチェーリンの対立に関しては本質的には彼らの主張は一致しているとみている(D, 34)。その理由として、彼は警察的方法を主張するチチェーリンも、これに反対して学生への「理性的原理にもとづく」「道徳的なくつわ」⁽⁴⁾をより強固なものだと主張するカヴェーリンもともに根本的な変革よりも、「平穏と秩序」を求める同一の希求に根ざしているからだと主張するのである(D, 34)。このイデオロギー的同質論は先にせつかく両者の自由主義の違いについて指摘した著者の見解にいさゝか矛盾するように思われる。だが当時の政治状況の下で、ゲルツェンとチエルヌィシェフスキイが政府と大学当局の政策にたいする学生の徹底的な抵抗を支援して、政府にたいする革命的な抗議運動を呼びかけはじめた時期であるこ

とを念頭におくならば、彼の解釈もあながち否定できないものがある。事実、この大学紛争にからむ権力と学生との対立の渦中でのカヴェーリンの海外出張は、彼の意図的な責任回避であった。学生の側に立って権力と対決することは彼の本意でなかった。このことは、デームチェンコがとりあげたカヴェーリンの妻宛の一連の未公開書簡によって裏づけられている(D, 35)。その上、この海外出張期にカヴェーリンの思想的立場は急激に変化し、チエルヌィシェフスキイをはじめとする革命的民主主義者への敵対的立場を公然と示しはじめるのである。

- (1) A. И. Герцен, Собр. соч. в 30-ти, т. XXVI, с. 281.
- (2) 上記問題について B. П. Козьмин, "Поездка Н. Г. Чернышевского в Лондон в 1859 году и его переговоры с А. И. Герценом." В сб. «Литература и история», М.-1969, 参照
- (3) Вспоминаания В. Н. Чичерина. М. У-нт., М. 1929, с. 63.
- (4) К. Д. Кавелин, Собр. соч. т. 2. стр. 1191.

四 カヴェーリンの思想的転換と チエルヌィシェフスキイ批判

デームチェンコはカヴェーリンの思想傾向を一八六二年二月以降の西欧出張の時期を境にして二分している。

この時期までの民主的自由主義者もしくは進歩的自由主義者から、君主主義的保守的自由主義者へ転向したとするのである。しかし、なぜ、そのような思想転換が生じたのかについて彼の論文は説得的な論証に乏しいので、こゝではその具体的経緯について検討してみよう。

カヴェーリンの思想転換は、一八六一年二月一九日の農奴解放令発布によるロシア社会の転換期と時期的に一致し、そのことと無関係ではあり得ない。彼はクリミア戦後のロシアの改革について、チチェーリンとともに皇帝政府の「上からの」改革に期待しており、ロシアにとって革命や反対党や陰謀は無縁であり、平和的で理性的な方式による改革こそ唯一の方式であるとしていた（前掲「出版者への手紙」参照）。したがって、一八六一年二月一九日のアレクサンドル二世の農奴解放令は、カヴェーリンにとって原則的に彼の改革方式についての信念を充たすものであり、彼は実際にもこれを歓迎した。

他方、チェルヌイシエフスキイとその同志たちは土地

付き無償解放と農村共同体の維持を目指していたので、これに反する解放令に強い不満をもった。そのあげく、人民大衆を基盤とする「下からの」変革を組織しようとする活動にとり組みはじめる。チェルヌイシエフスキイは政府の解放令の公布に対抗して、農民に一斉蜂起の準備をよびかけた檄文「地主領農民への同情者からの挨拶」（一八六一年）を書いた。彼の周辺の同志たちも秘密革命組織「大ロシア人委員会」を組織したり、青年や兵士や農民たちに向けた各種の檄文を作成している。それはまだ少数のインテリゲンチヤによるものとはいえ、ロシアにおける最初の「下からの」革命的な変革の試みであり、一八七〇年代から八〇年代のロシアのナロードニキ運動の先駆をなすものであった。

農奴解放令をめぐるこのような相反する二つの流れのなかで、従来、決定的な対立にはいたらなかった自由主義と革命的民主主義の対立の激化がカヴェーリンにも明瞭に認識されるにいたった。彼はこの頃から革命的民主主義者たちを批判し、戦後にはじまる進歩的自由主義者の事業が彼らによって破壊されたとして、チェルヌイシエフスキイらを非難するのである（K・K・グロートへ

の手紙、一八六二年六月一五(二七日付)。

この時期に、カヴェーリンとゲルツェンの関係もゆらぎはじめる。周知のように、ロンドンのゲルツェンははじめこの解放令の発布を感激の涙をもって迎えた。しかし、法令の实质が農民の土地付き無償解放という彼の期待から余りにかけ離れたものであることと、ポーランドへの弾圧の強化を知ってからは、皇帝支持の態度を改めて「人民の中へ」のスローガンをかけて政府にたいするあらたな闘いを提起する⁽¹⁾。

この時期に表面化したカヴェーリンと革命的民主主義者との主要な対立点のひとつは、そのロシア人民観である。ゲルツェンがとくに非難したのは、カヴェーリンがロシアの人民を宿命的に政治に無能な存在とみなしている点である。事実この点では、カヴェーリンは、チチェーリンと同様に、政治的受身性をロシア人民の特性としてとらえ、国家的事業における皇帝政府のイニシアチヴをロシア史の基本的特質とさえ考えていた。そして、その観点から滞欧中も知人宛の手紙の中で、ロシアの革命的民主主義者たちの行動を批判して、彼らの人民観について「わが国の無分別な革命的党派はわが国の大衆につ

いて、全く知りもせず、また理解もせず、ろくに考えもせずに行動している、とみています」と書いていた(③・Φ・ラーデン男爵夫人宛一八六二年七月八(二〇日付手紙)。

もっとも、チエルヌイシエフスキたちの人民観については、ゲルツェン自身も批判的であり、「変化のはじまりではないか」を念頭にしたと思われる彼の評論「解放の糧」(『コーロル』一八六二年二月一日号)のなかで、若い急進派の人民観の観念性を衝き、「彼らの側に人民はないのだ」⁽²⁾とさえ断じている。しかし、ゲルツェンにとってそれよりもさらに我慢ならなかったのは、ロシア人民の政治的無能さを前提とするようなカヴェーリン流の人民観と改革論であった。ゲルツェンの激しい怒りの手紙に接したカヴェーリンは、その返事(一八六二年六月一日(五月三〇日)付)のなかで自己弁明を試みるとともに、「僕には君との分裂は悲しい。しかし、どうしようもない」と記している⁽³⁾。

チエルヌイシエフスキとニコライ・セルノソロヴィエーヴィッチが逮捕投獄されたというロシアからの知らせを、カヴェーリンがスイスで受けとったのは一八六

二年の七月か八月のはじめであつた。彼はこのことを知らせたゲルツェン宛の八月六日付の手紙のなかで、次のように自己の感想を記している。

「ロシアからの情報は、僕の観点からは、それほど悪くありません。逮捕されたのはニコライではなくて、アレクサンドル・ソロヴィエーヴィッチです。⁽⁴⁾この逮捕は僕をおどろかせないし、君に白状すれば、憤慨すべきだとも思いません。これは戦争です。どちらかが相手を打負かすのです。革命的党派は政府を打倒するために、すべての手段をよいとみなしていますし、政府は自分なりの手段で防衛するのです。これは卑劣なニコライ帝時代の逮捕と流刑ではありません。当時は、人々は思想や信念や信仰や言論のゆえに破滅させられました。僕は、仮に君がもし政府であつたならば、君に反対して陰に陽に活動しはじめた党派に対して、君がいかに行動するかを見たいものです。チェルヌイシェフスキイを僕は大変、大変好いています。だが、あんな間抜けな (brouillon) ⁽⁵⁾ 気の利かない、自己過信の人物は僕はいまだかつて見たこともありません。それにしてもなんのために破滅しようというのか！」⁽⁵⁾

そこには、チェルヌイシェフスキイたち革命的民主派の思想や行動への共感は全く失われている。政府の改革への反対は不可解で、不当なものとして敵視されているのである。

カヴェーリンが同じ年の九月二三日—一〇月五日付で妻宛に書いた手紙は、デーム・チェンコが *ИРЛИ* の手稿部資料から引用しているめずらしいものである。そのなかで、彼はチェルヌイシェフスキイとセルノソロヴィエーヴィッチがともにアレクセーエフ要塞内の牢獄において、放火犯がつかまり、秘密の檄文と印刷の事件も暴かれ、罪人も発見されたと、淡々とした調子で伝えている。そして、農民問題は予想以上に順調に進んでおり、人民は従順になり、容易に新しい秩序に慣れてきているとして、「解放の大事業は赫々たる勝利を収めた」⁽⁶⁾ (Д.: 37) と喜ばし気に記している。さらに、人民の皇帝^{ツァーリ}への崇拜は限りがなく、皇帝権力はロシア史上かつてなかったような栄光と光輝のなかにあるとして、民衆の従順さをたゞえて、民衆が地主や教養階級以上の政治的感覚と本能を示したとみなしている。そのうえ、それが、自分の予見し、予言したことであると自己の思想の勝利を誇つ

てさえいる (D. 38)。彼の立場はこの時点では完全に皇帝権力の政策の支持者である。

彼は同じ手紙の中で、チエルヌイシェフスキイの同志で、檄文「大ロシア人」の配布の罪で捕えられたB・A・オーブルチェフについて言及している。彼が広場に引き出され、市民権を奪われ、かせをはめられた時に、民衆が刑吏にそれを充分に肉にくいこませると叫んだことを伝えて、「彼がもし、大衆の同情を期待していたのなら、その瞬間にひどく失望したことだろう。彼にとって己の誤ちは高くついたものだ」と記している (D. 38)。

チエルヌイシェフスキイにたいしては、元老院は一八六四年二月七日に「すべての権利をとりあげ、一四年間の鉱山の苦役とその後のシベリア永久流刑」という判決を下した。そして皇帝は七年間の苦役と一八八九年までの約二五年間に及ぶ流刑を科したのである。チエルヌイシェフスキイが期待したロシアの前衛的インテリゲンチアと人民大衆の結合による「下からの」変革の実現には、

その後さらに四半世紀以上の時が必要であった。⁽⁶⁾

(1) 前掲・拙稿「ゲルツェンとカヴェーリン」参照

(2) A. И. Герцен, Собр. соч. в 30-ти т. XVI, с. 29.

(3) Письма К. Д. Кавелина. с. 54.

(4) 実際にこの時に逮捕されたのは、兄のニコライ・セルノソロヴィエーヴィッチである。カヴェーリンの聞き違いであろう。

(5) Письма К. Д. Кавелина. с. 82.

(6) チエルヌイシェフスキイの心酔者であったB・И・レニン、農奴解放令発布五〇周年(一九一一年)について書いた論文『農民改革』とプロレタリア農民革命のなかで、次のように記している。

「六一年の革命家たちは孤独であり、一見したところ完敗を喫したようにみえる。実際には、彼らは当時の偉大な活動家たちであった。そして、われわれがその時代から遠ざかれば遠ざかるほど、彼らの偉大さは一層明瞭になるし、当時の自由主義的改革論者たちの卑小さ、貧弱さも一層明確になってくる。」B. И. Ленин, Полн. собр. соч. т. 20, с. 140. 邦訳レーニン全集第一七巻一一七ページ。

(工学院大学教授・一橋大学講師)